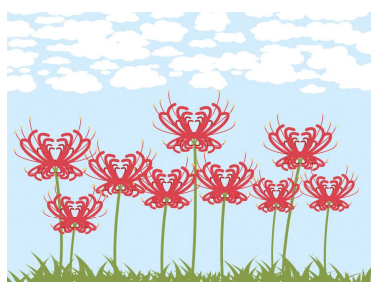


ひまわり



令和4年9月26日(月)

彼岸花（ヒガンバナ）



この23日は「秋分の日」でした。この日の趣旨は、「祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ」と法律で定められています。この日を中心として、前後3日間を合わせた7日間が「秋のお彼岸」です。お墓参りをした人もいるでしょう。ちなみに「春のお彼岸」は、春分の日を中心とした7日間です。

私もこの連休中に墓参りに行きました。日中の気温はまだまだ高いものの、時折吹き抜けていく秋風が何とも爽やかでした。墓前で心穏やかに手を合わせていると、何とも心が落ちつくものです。

墓地を見渡すと、そこかしこに赤い花が咲いていました。彼岸花（ヒガンバナ）です。秋のお彼岸の頃に咲くので、このような名前がつきました。葉のない茎を地上に伸ばし、真っ赤な花をつけていました。中国原産の植物で、人為的に日本に持ち込まれた植物です。このような植物を帰化植物といいます。別名は曼珠沙華（まんじゅしゃげ）。その昔、「曼珠沙華（まんじゅしゃか）」という歌があったことを思い出します。【歌：山口百恵】

ところで、ヒガンバナの球根は強い毒性を持っています。毒性の原因物質は、リコリンやガラントミンなどです。間違えて食べると中毒を起こします。その症状は、吐き気、腹痛、下痢、重症の場合は中枢神経の麻痺を起こすこともあります。このように書くと、なんて危険な植物だと思うでしょう。

しかし、「毒薬変じて薬となる」の言葉どおり、ガラントミン（ $C_{17}H_{21}NO_3$ ）には、有用な薬理効果があることが1950年代に証明されました。軽度及び中等度のアルツハイマー型認知症の進行抑制効果があり、日本では、2011年度から「レミニール」という名前の飲み薬が使われるようになりました。

2025年になると、65歳以上の5人に1人が認知症を発症するという予測データがあります。もはやこの病気は国民病ともいえるでしょう。現在、この病気の治療に使われる薬は、症状の進行抑制にとどまっています。皆さんの中から、この病気の根本治療薬を開発してくれる人が出てくることを願うばかりです。

学校ホームページで、日々の教育活動のようすを公開しています。どうぞ、本校ホームページを閲覧してください。



彼岸花（ヒガンバナ）



複数の花の集まりで構成されている。一つの花茎に5～7輪ほど咲く。



ヒガンバナ科ヒガンバナ属の植物

別名は「曼珠沙華（マンジュシャゲ）」

原産地は中国大陆であり、人為的に持ち込まれた帰化植物。秋の彼岸の頃に咲くことが名前の由来。

地下の鱗茎（球根）に強い毒性がある。毒性の成分物質は、リコリンやガラタミンなど。花が枯れた後に出てくる葉がニラに似ているので、誤ってそれを食べると、激しい中毒症状に襲われる。しかし、ガラタミンには、アルツハイマー型認知症の進行抑制効果がある。

撮影地 泉佐野市 撮影日 2022. 9. 23（彼岸の中日）